

第139回 埋蔵文化財セミナー資料

京都・縄文最前線

—つたわる、ひろがる縄文文化—

【報告】 下水主遺跡をめぐる縄文時代の交流

—土偶の左腕はどこから?—

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

桐井 理揮 調査員

P 1 ~ P 8

【講演】 京都盆地の縄文遺跡とその交流

—京都市上里遺跡の調査成果を中心に—

京都市考古資料館

高橋 潔 副館長

P 9 ~ P 16

【講演】 縄文時代の交流

立命館大学文学部

矢野 健一 教授

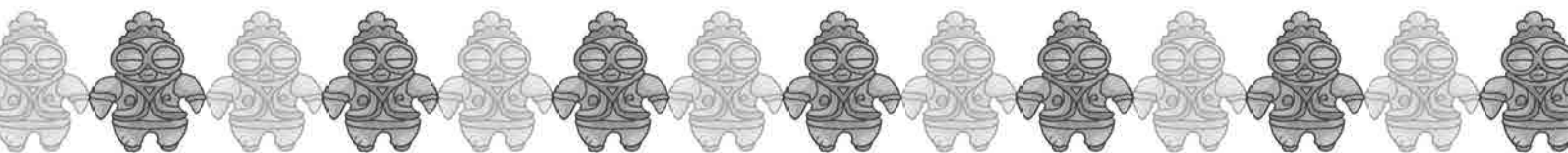
P 17 ~ P 26

日時：平成30年11月10日（土） 午後1時45分から午後4時30分

場所：京都テルサ（京都府民総合交流プラザ） 東館3階 大会議室

主催：京都府教育委員会

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター



しもみずし 下水主遺跡をめぐる縄文時代の交流

どぐう ひだりうで —土偶の左腕はどこから?—

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

きりい りき
桐井 理揮 調査員

1. 下水主遺跡について

下水主遺跡は京都府城陽市の木津川東岸に位置します。近接する水主神社東遺跡と合わせると南北約1,200m、東西約900mの範囲に広がる大きな遺跡です(第1図)。平成23年度から、新名神高速道路城陽JCT・ICの建設に伴って当調査研究センターや京都府教育委員会が継続的に調査を行っており、これまでに約65,000㎡の範囲を発掘調査しました。その結果、縄文時代から近世・近代にいたるまでの遺構、遺物が見つかりました。その中でも今回の報告の中心となるのは、縄文時代についてです。まずは縄文時代の下水主・水主神社東遺跡の概要について紹介しておきたいと思います。

2. 縄文時代の下水主遺跡

下水主遺跡の調査では、これまで多くの調査区から縄文土器が見つっていますが、その時期は縄文時代の終わりごろ、今から約3000年前の縄文時代晩期と呼ばれる時期に限られています。

遺跡の広い範囲で縄文土器が出土しているとはいえ、住居跡などの生活の痕跡がわかる事例は少なく、土器の多くは後世の遺物に混じって出土しています。唯一、溝の中から大量の土器が棄てられた状態で発見されたのが、今回の報告の中心となるL地区の調査です。以上の点から、広い下水主遺跡の調査範囲でも縄文時代の人々が生活していたエリアは限られており、しかも、縄文時代の終わりごろになってようやく、木津川近くの低地部に人々が住むようになったと考えられます。

L地区では、幅約30m、深さ約3mもある大きな溝が見つかりました。この溝は、木津川から溢れだした洪水によって地盤が削られてできた溝で「氾濫流路」と呼ばれています(第3・4図)。この氾濫流路(NR42)からは洪水によって流れ込んできた直径60cmもある自然木や堅果類、木の葉などが大量に出土しました。木を加工した製品は多くありませんが、櫂(舟を漕ぐためのオール)が見つかりました(第4図)。木津川を行き来するために川舟を使用していたのでしょうか。

この氾濫流路の中からは大量の縄文土器が見つかりました。この土器は器表面の摩滅が

少なく、煮炊きしたときに付着するスス等も残っていました。また、バラバラの小さな破片となった状態ではなく、元の形を保ったものも多く認められました。そのため、先に述べた自然木のように洪水で流されてきたものではなく、付近で生活していた人々が、氾濫流路の中に土器をまとめて投棄したものと考えられます。

また、氾濫流路は出土した自然木などを年輪年代測定にかけたところ、およそ3,000年前（縄文時代晩期）に形成されたものであることが明らかになりました。これまでの調査で、同じ木津川流域の椋ノ木遺跡（精華町）や佐山尼垣外遺跡（久御山町）でも同じような時期の遺跡が見つっています（第5図）。木津川流域、あるいは山城地域全域を見渡しても、縄文時代晩期前葉にはやや標高の高い土地にムラが集まる傾向にあります。そのため、木津川流域、特に低地部では晩期前半の遺跡はほとんど見つかりませんでした。下水主遺跡周辺でも縄文時代晩期中ごろになり、ようやく人間が住み始めたと考えられます。

3. 下水主遺跡と交流

今回の下水主遺跡の調査成果から、縄文時代の「交流」について2つのキーワードから考えてみたいと思います。

（1）黒く輝く鉱物、角閃石を含む土器（第7図、第1表）

縄文土器は粘土を焼いて作られた焼き物ですが、その素地となる粘土には砂粒などを混ぜ込んで土器の生地を作ります。この混ぜ込まれた砂粒などのことを「混和材」といい、焼いたときに粘土の収縮率を抑え、土器の焼き損じを減らすという効果があります。

下水主遺跡から出土した縄文土器を詳しく観察してみると、土器の中に光沢のある砂粒が多く含まれていることに気が付きました。この鉱物の正体は「角閃石」や「黒雲母」といった鉱物で、現在の大阪府八尾市・東大阪市周辺（生駒山西麓）などで作られた土器のなかに多量に含まれていることが知られています。このような土器は決まって「チョコレート色」をしており、これまで、大阪の生駒山西麓から持ち運ばれたと考えられてきました。しかし最近の研究で、縄文時代にはこの角閃石を多量に含んだ土器が大量に出土する遺跡が、繰り返し近畿地方各地に現れるということが分かってきました（矢野2008）。そして、本当に生駒山西麓で作られた土器が持ち運ばれてきているのか、問題になっています。

下水主遺跡の土器の破片を1片ずつ数えてみると、48%の土器に角閃石が多量に含まれていることが分かりました（第1表）。この数値は驚くべき多さです。しかし、同じ時期の京都府内の遺跡を見てみると、同じ木津川流域の椋ノ木遺跡、佐山尼垣外遺跡、京大構内遺跡（京都市）などでは角閃石が多量に含まれた土器はほとんど認められないのです。一方、さらに遠方の北金岐遺跡（亀岡市）や千代川遺跡（亀岡市）では角閃石が多量に含まれる

土器片の存在が報告されています。

この角閃石が多量に入った土器がなぜ下水主遺跡から多量に出土するのでしょうか。下水主遺跡の周りには、角閃石が得られる岩石は見つかっていないので、以下のような可能性が考えられるでしょう。

①他地域(生駒山西麓地域)で作られた土器が下水主遺跡に多量に持ち込まれた。

②混和剤として使用するため角閃石自体、あるいは粘土自体が持ち込まれた。

いずれにせよ、下水主遺跡のムラは、他のムラとの広い交流関係を持っていたと言えます。土器づくり、あるいはモノの交換などで、日常的に活発な行き来があったのでしょう。

(2) 左腕はどこから？

2つめのキーワードは「遮光器土偶^{しゃこうきどぐう}」の腕です。下水主遺跡では、大量の縄文土器の中から、長さ5cm程の小さな土偶の腕の破片が見つかりました。腕の破片は、片側は胴体部分とつながっていた部分で、粘土が剥がれた痕跡が認められます。特徴的なのが、三つ又に分かれた指先の表現です。西日本の縄文時代の終わりごろの土偶は、小形で頭や手足の表現を省略したものが多く、写実的なものはほとんど見られません。このような手の特徴をもつ土偶は東北地方を中心に分布する「遮光器土偶」によく見られるものです。これまで、近畿地域では遮光器(系)土偶は、兵庫県の篠原中町遺跡^{しのはらなかまち}(神戸市)など4か所の遺跡で見つけていましたが、京都府内では初めての発見となりました(第8図)。

では、この土偶はどこからやってきたのでしょうか。残念ながら、この結論はまだ出ていません。しかし、下水主遺跡の土偶をよく見ると、幅5mmほどの粘土の帯が縦方向に貼り付けられていることがわかります。このように縦方向の粘土を貼り付ける表現は、東北地方の遮光器土偶ではあまりみられません。腕の形、指先の作り方など遮光器土偶に通ずる部分は多いものの、表現方法は微妙に異なっていると考えられます。

腕の破片から断定することは困難ですが、下水主遺跡の土偶は「遮光器土偶そのものではないけれども、遮光器土偶の影響を受けて作られた土偶」とでもいうべきものでしょう。縄文時代の終わりごろは、近畿地方にもわずかながら東北地方の土器がもたらされています。その中でも、直接持ち運ばれてきたのではなく、「近畿地方で作られた東北地方の影響を受けた土器」が含まれています(濱田1997)。想像をたくましくするならば、縄文時代の終わりごろに、東北地方の土偶を知っている人々が数百キロ以上の長距離を西へと移動して、下水主遺跡周辺にもやってきたのではないのでしょうか。実際、椋ノ木遺跡では府内に産出しない「翡翠^{ひすい}」で作られた硬玉大珠^{こうぎょくたいしゅ}がもたらされていますし、友岡遺跡^{ともおか}(長岡京市)では長野県を中心に分布する「石冠^{せつかん}」が出土しています(第6図)。この時期、東日本と関係する遺物が府内各地で見つかっているのです。

ところで、この土偶を発見したのち、土偶の一部となる破片が他にも存在しないのかを確認するため、改めてすべての遺物を見直しました。しかし、土偶と考えられる破片は、先の腕の破片1つだけでした。土偶が完全な形で発見されることは極めてまれです。土偶を故意に破壊することは、それが復活・再生につながり、より豊かな生命を生み出す意味があるとする説があります(水野1974)。下水主遺跡の土偶も残りの部分は付近に眠っているのかもしれませんが。

4. まとめ

「角閃石を含む土器」、「遮光器土偶」という2つのキーワードから、下水主遺跡を中心にした縄文時代の交流について考えてみました。今回の調査によって、下水主遺跡は縄文時代の終わりごろにできたムラであり、かなり広範囲にわたる地域との交流関係を持っていたということが明らかとなりました。ただし、遮光器系土偶は東北地方のものではなく、どこかを經由してもたらされた可能性が高いと考えています。今後、その流入ルートが問題となるでしょう。

今回紹介することはできませんでしたが、下水主遺跡では弥生時代中期終わりごろ(およそ2000年前)の船着き場や、弥生時代終わりごろ(およそ1800年前)に岡山県や徳島県からもたらされた土器も見つかっています。平安時代には、付近は木津川水運の中継地として機能したと考えられています。現在、下水主遺跡の上には城陽JCT・ICが完成し、大津から神戸方面へ向かう新名神高速道路と、城陽から奈良方面へ向かう京奈和自動車道の分岐点となっています。縄文時代から現代まで、下水主遺跡周辺は時代を超え、様々な人やモノが行きかう場所であったと考えられます。

【参考文献】

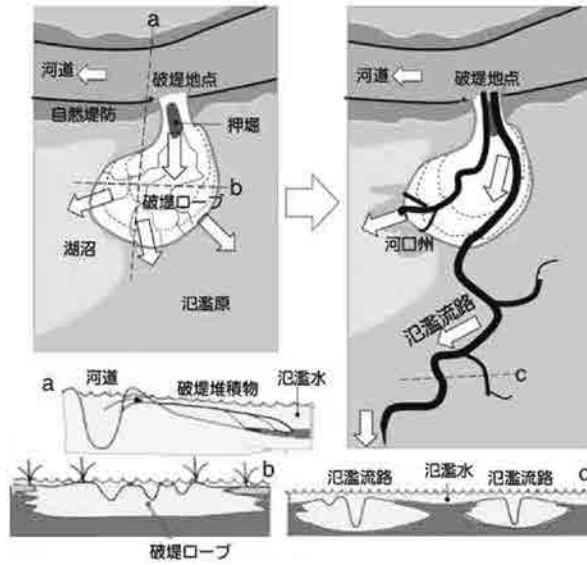
加藤雅士 2015「縄文時代の“京都”における交流—主に府内の遺跡からみた地域間交流—」『京都「交流」の考古学—縄文・弥生・古墳時代の交流史—』第130回埋蔵文化財セミナー資料 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

濱田竜彦 1997「近畿地方における亀ヶ岡系土器の受容について—滋賀里Ⅲ b 式期にみられる受容と規制を中心に—」『滋賀考古』第17号 滋賀考古学研究会

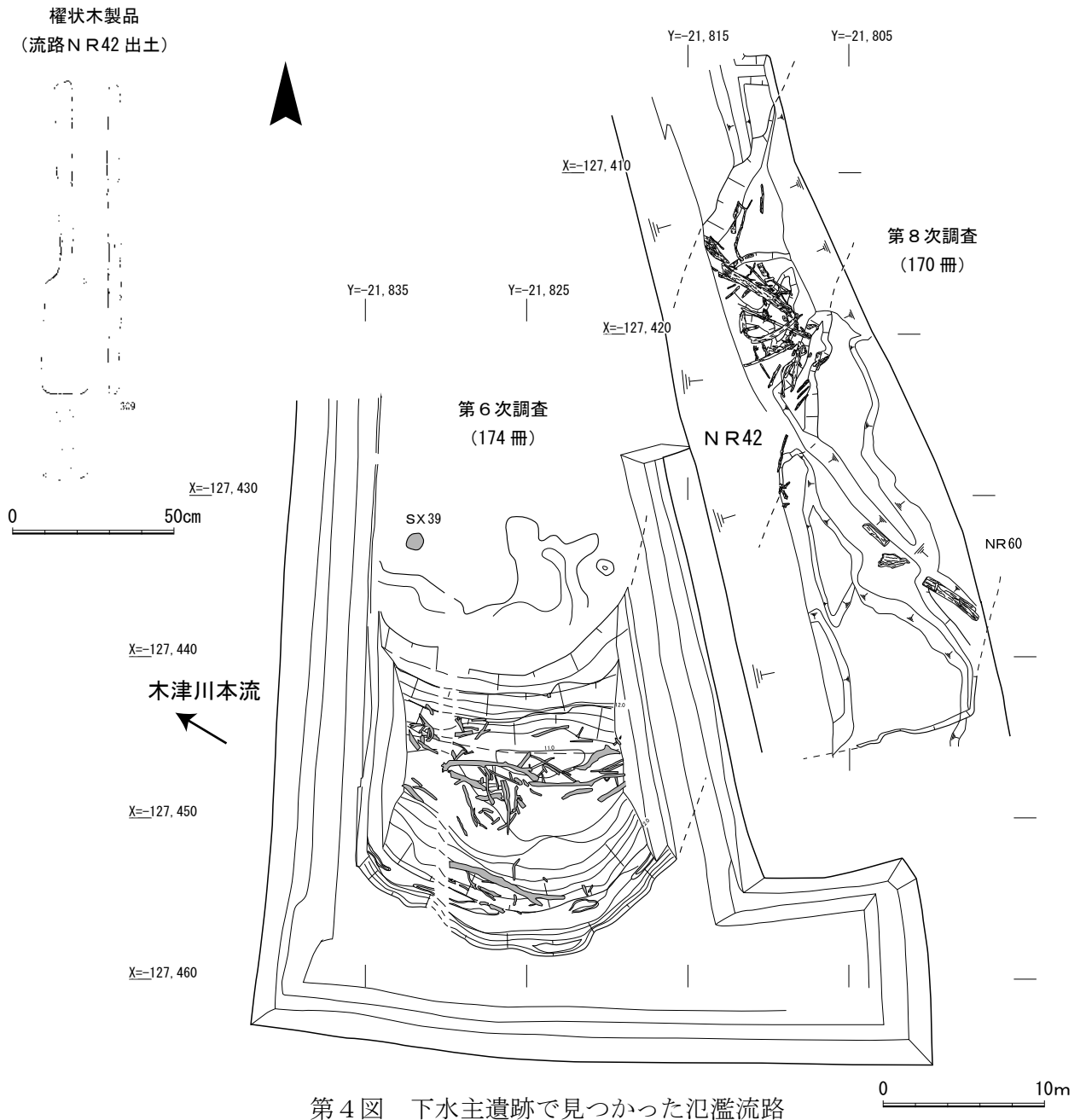
水野正好 1974「土偶祭式の復元」『信濃』第26巻第4号 信濃史学会

矢野健一 2008「角閃石多量含有土器」『縄文時代の考古学』同成社

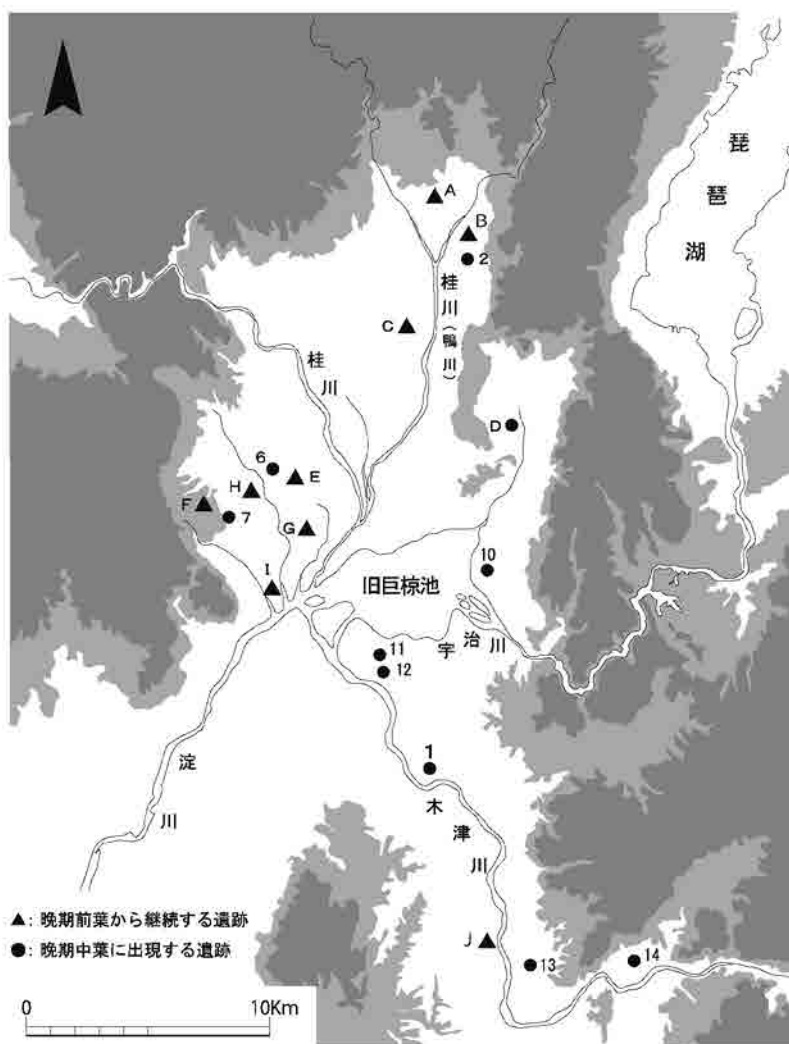
※図版は、特に記載のない場合は『京都府遺跡調査報告書』第174冊(2018)から引用しました。なお、本文に記載した当センターの刊行物は、インターネットでご覧いただけます。



第3図 氾濫流路の形成 (増田富士雄氏論文『京都府遺跡調査報告集』第173冊) から引用)



第4図 下水主遺跡で見つかった氾濫流路



▲: 晩期前葉から継続する遺跡
●: 晩期中葉に出現する遺跡

- | | | | | |
|----------|-----------|----------|-----------|---------|
| A. 植物園北 | B. 北白川追分町 | C. 烏丸御池 | D. 戌亥 | E. 中臣 |
| F. 大原野石見 | G. 鶏冠井 | H. 上里 | I. 松田・下植野 | J. 椋ノ木 |
| 1. 下水主 | 2. 京大構内 | 3. 戌亥 | 4. 大原野石見 | 5. 烏丸御池 |
| 6. 渡川 | 7. 井ノ内 | 8. 開田城ノ内 | 9. 伊賀寺・友岡 | 10. 寺界道 |
| 11. 佐山 | 12. 佐山尼垣外 | 13. 堂ノ上 | 14. 釜ヶ谷 | |

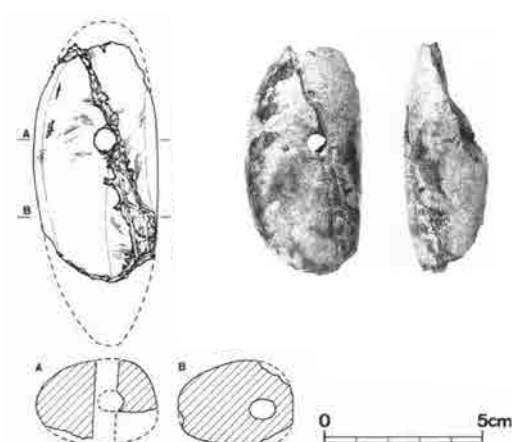
第5図 山城地域における縄文時代晩期の集落



※高さ7.8cm、幅8.2cm、重さ320g

②長岡京市友岡遺跡出土 石冠

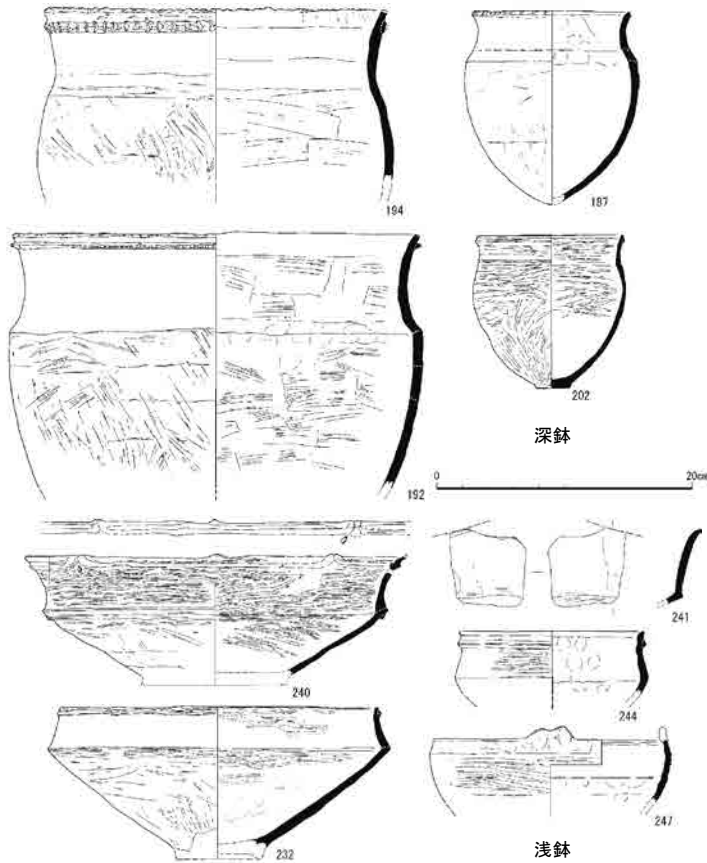
(『京都府埋蔵文化財情報』第105号)



①精華町椋ノ木遺跡出土 翡翠大珠

(『京都府遺跡発掘概報』第105冊)

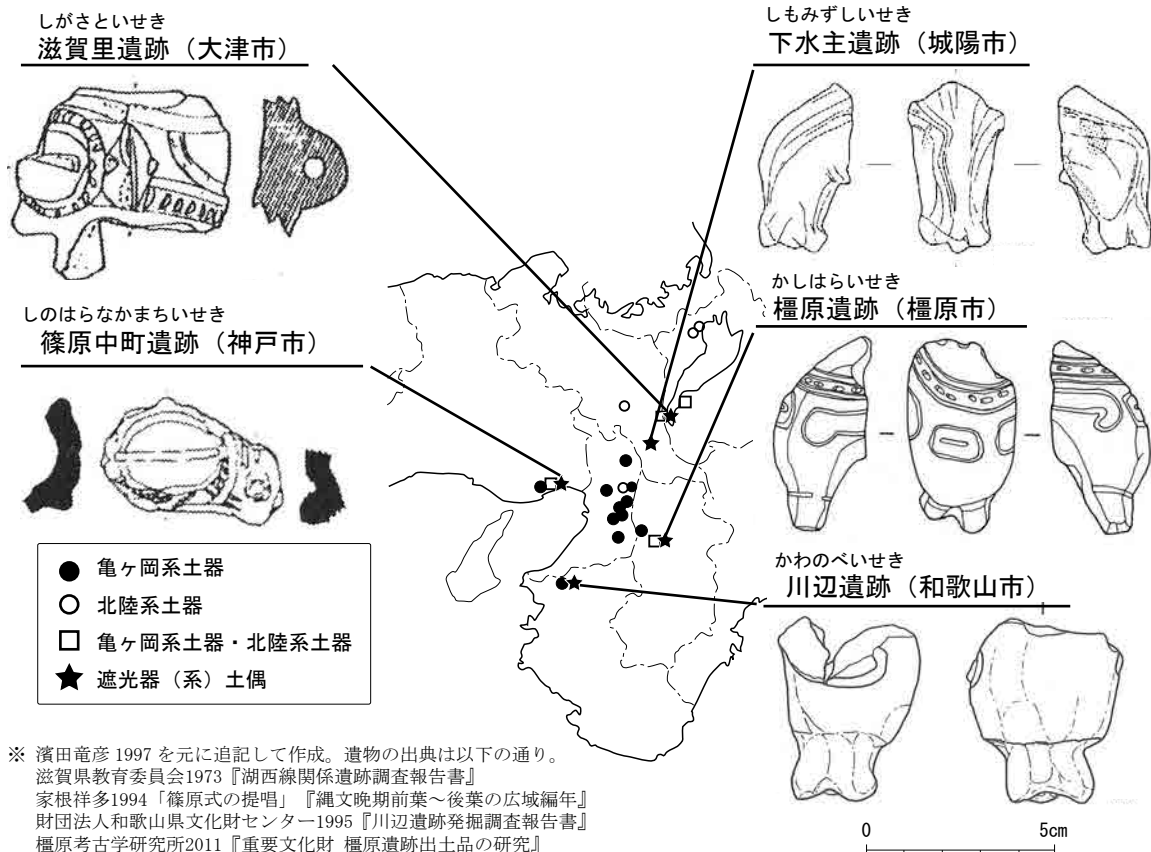
第6図 東日本と関連する遺物



第1表 下水主遺跡における角閃石を含む土器の比率

遺構	器種	角閃石多量含有		比率
		○	×	
NR42	深鉢	22	86	20%
	浅鉢	3	42	7%
	計	25	128	16%
NR38	深鉢	9	10	47%
	浅鉢	4	2	67%
	計	13	12	52%
S X 40	深鉢	17	23	43%
	浅鉢	9	3	75%
	計	26	13	67%
S X 43	深鉢	5	25	17%
	浅鉢	4	1	80%
	計	9	26	26%
計	深鉢	52	142	27%
	浅鉢	31	48	39%
	計	83	190	48%

第7図 下水主遺跡の氾濫流路から出土した縄文土器



※ 濱田竜彦 1997 を元に追記して作成。遺物の出典は以下の通り。
 滋賀県教育委員会1973『湖西線関係遺跡調査報告書』
 家根祥多1994「篠原式の提唱」『縄文晩期前葉～後葉の広域編年』
 財団法人和歌山県文化財センター1995『川辺遺跡発掘調査報告書』
 榎原考古学研究所2011『重要文化財 榎原遺跡出土品の研究』

第8図 近畿地域における遮光器(系)土偶と亀ヶ岡系土器の分布

京都盆地の縄文遺跡とその交流

—京都市^{かみさと}上里遺跡の調査成果を中心に—

京都市考古資料館
たかはし きよし
高橋 潔 副館長

1 はじめに

縄文時代は旧石器時代に続いて狩猟と漁撈^{ぎょろう}によって生業が成り立ち、定住でなく、季節によって移動をしていたと、我々が中学・高校のころに習った日本史では教わりました。ところが、青森県^{あおもり}三内丸山遺跡^{さんないまるやま}をはじめとする東北地方の縄文遺跡の調査成果によって、縄文時代像は大きく修正されることとなりました。また、京都でも、2010年頃を中心とした縄文時代遺跡の調査成果によって、京都の縄文時代像も見直しが迫られました。

2 京都盆地北部の縄文時代遺跡

東北・関東・北陸・中部地方などでは、縄文時代といえば、とても豊かで創造的な土器や装飾品が思い起こされます。一方、京都を含めた関西では、比較的シンプルな作りの土器や装飾品が多く、東高西低の感がぬぐえません。

しかし、京都に縄文時代、人が住んでいなかったわけではなく、縄文時代の遺跡が各所に知られています(第1図)。なかでも京都盆地の北東部では吉田・北白川に京都大学構内をはじめとする遺跡群が知られており、発掘調査が比較的多く行われてきています(第6図)。近年の調査では、京都市^{かみさと}上里遺跡、長岡京市^{ながおか}伊賀寺遺跡^{いがじ}など盆地の西側の乙訓地域^{おとくに}の遺跡において調査成果があがり、京都のみならず、関西における縄文時代の集落の在り方が議論されました。

3 京都市上里遺跡の調査

上里遺跡は、京都盆地の西部、桂川右岸のいわゆる乙訓地域に属します。北から細長く南東へ伸びる向日丘陵^{むこう}を西へ越えた、西山山地^{にしやま}東麓^{ひろ}に広がる高位・低位段丘上に立地しています。東には向日丘陵の西側を南流する小畑川^{おぼたがわ}、北には西山山地から東へ流れる善峰川^{よしみねがわ}があり、この二つの河川の合流点の南西に遺跡が広がっています(第2図)。

調査は京都市の計画した大原野^{おおはらの}伏見・向日町線道路新設工事に伴って、路線予定地内を2001～2008年度にかけて、遺跡範囲の南北の中央を横断する形で行いました(第3図)。主

な遺構としては、長岡京期の条坊^{じょうぼう}関係遺構及び建物などのほか、縄文時代後期・晩期、弥生時代前期、古墳時代中期～後期、奈良時代の各時代の遺構がありました。

ここで取り上げる縄文時代晩期の遺構は、一部は遺跡範囲の西寄りでも見つかりましたが、その主体は遺跡の東端にありました。遺跡の東端部は小畑川^{ほんらんげん}氾濫原に接するやや高い河岸段丘^{かがんだんきゅう}上に位置しており、後世に小畑川によって東側は削り取られていました(第4図)。

この調査では、^{たてあなたてもの}竪穴建物10棟、^{どきかんぼ}土器棺墓26基、^{どこうぼ}土壙墓4基、^{どこう}炉、^{どこう}土坑、柱穴、流路状遺構3条、^{はいせきいこう}配石遺構1基、^{しゅうせきいこう}集石遺構など、多様な遺構が検出されました。遺物も多彩で、縄文土器、石器、土製品、玉類などがあります。土器は^{ふかぼち}深鉢を主体に、^{こくしよくまけん}黒色磨研の^{あさばち}浅鉢、^{かしはらしき}橿原式文様を施すものや^{おおぼらけい}大洞系のものがみられます。石器には^{せきぞく}石鏃・^{いしきり}石錐・^{さつき}削器・^{せきとう}石刀・^{せきぼう}石棒・^{せきふ}石斧・^{たたきいし}敲石・^{すりいし}磨石・^{くぼみいし}凹石・^{だいいし}台石・^{といし}砥石・^{こがたませいせきふ}小型磨製石斧などがありました。^{はくへんせつき}剥片石器はほとんどがサヌカイト製で、^{にじょうざん}二上山産のものと^{かなやま}金山産のものがあります。石刀は多くが^{ねんばんがん}粘板岩製で、^{つか}柄部分に^{せんこく}線刻を施す「^{かしはらがた}橿原型」のもので、石刀は加工途中や破損品も多くあることから、当地で製作されたと考えています。土製品には半輪状土製品、^{ゆうこう}有孔球状土製品、^{どせいみみかざり}土製耳飾など、玉類には^{ひすい}翡翠製丸玉3個、^{かつせき}滑石製勾玉1個があります。特に、流路状遺構の埋土には多量の土器・石器とともに、木片などに混じって炭化した穀類^{けんかるとい}や堅果類などや焼けた動物の骨片が多く含まれていました。これらは不用となった土器・石器などととも、捨てられた食物^{ごんし}残滓とみられます。ほかに「^{しんしゃ}辰砂」原石が出土しています。内面に^{すいぎんしゆ}水銀朱の付着した土器や^{いしざら}石皿・磨石なども出土しており、朱の精製が当地で行なわれたことを示しています。

また、これら出土土器の検討から、この集落はおおよそ300～400年にわたり継続的に営まれ、1期から5期の変遷(第5図)が見て取ることができました。最終的には小畑川の氾濫によって水没して住めない環境となったため、より東の高台へ移動したことがわかっています。

4 おわりに 一上里遺跡に見る広域交流

上里遺跡にみる縄文時代晩期の生活はその地域内のみで営まれたわけではなく、日常的な交流に加え、さらに広域にわたる交流により成り立っていたことが出土遺物により判明しました。

土器ではいわゆる^{いこまさんせいらく}生駒山西麓産^{たいど}胎土のものはあまり多くありませんが、一定量が入っています。また、それよりも割合が多いのではないかと思われる東日本、北陸の影響を強く受けた土器が目立ちます。

石器では石鏃や石錐・削器の石材として使われるサヌカイトが^{にじょうざん}二上山(奈良・大阪)とと

もに、金山(香川)から持ち込まれ、集落内では製作址^{あと}も検出しています。製品ではありませんが、黒曜石^{こくようせき}が姫島^{ひめじま}(大分)から運ばれています。この集落では祭祀^{さいし}に用いたと思われる石刀が多数出土しました。いずれも粘板岩で作られています。未製品も出土しましたのでこの集落で製作されていたと考えられます。

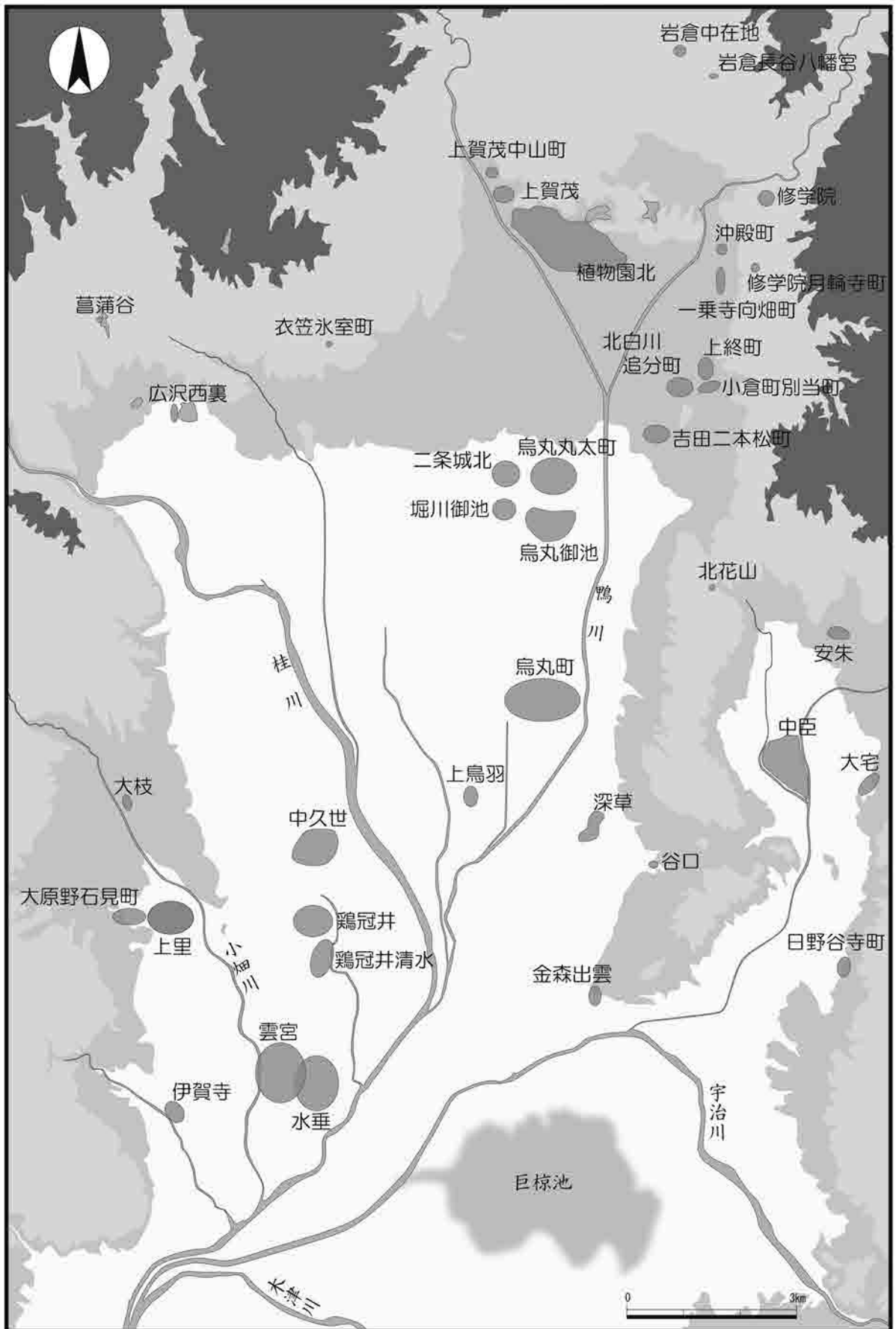
その他では、これも祭祀に用いられたと思いますが、土器などに塗られる朱の原料、辰砂原石が出土しました。石皿や磨石に朱の付着するものがありますので、原石が持ち込まれ精製^{せいせい}されていたことも明らかになりました。この辰砂は奈良の丹生^{にゅう}、いわゆる領家変成帯^{りょうけへんせいたい}で産出します。玉類には翡翠製の丸玉、滑石製の勾玉があり、翡翠は新潟の糸魚川^{いとがわ}の産出、滑石もその近くで産出するといえます。また、多く出土した食物残滓のなかに鯛やハゼといった海洋産の魚類の骨も見つかっています。

これらは上里遺跡に限ったことではありませんが、当時の交易が近隣の集落同士に留まらず、かなり広範にしかも比較的頻繁^{ひんぱん}に行われていたことがわかります。

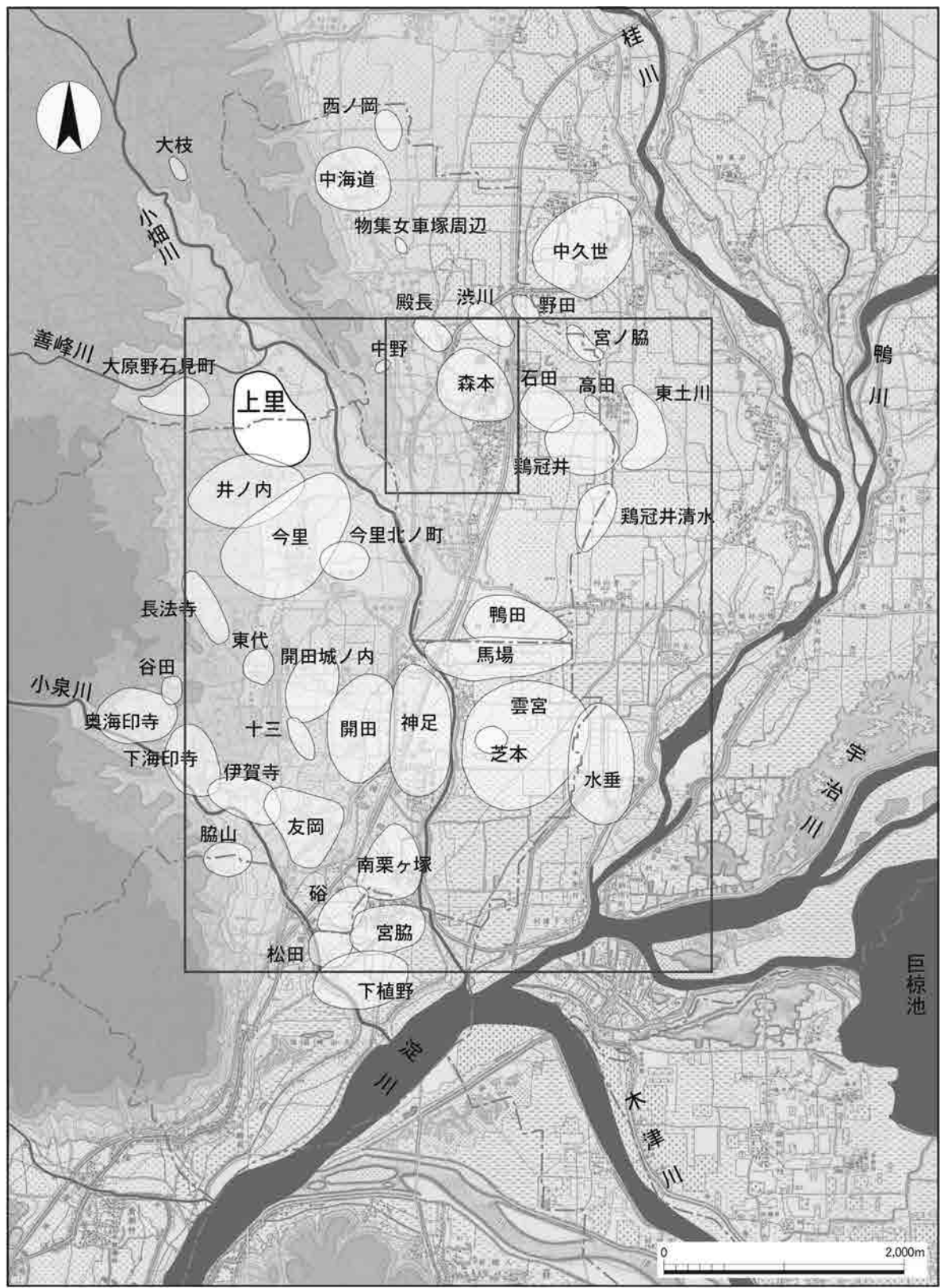
【参考文献】

『上里遺跡Ⅰ - 縄文時代晩期集落遺跡の調査 -』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第24冊 2010

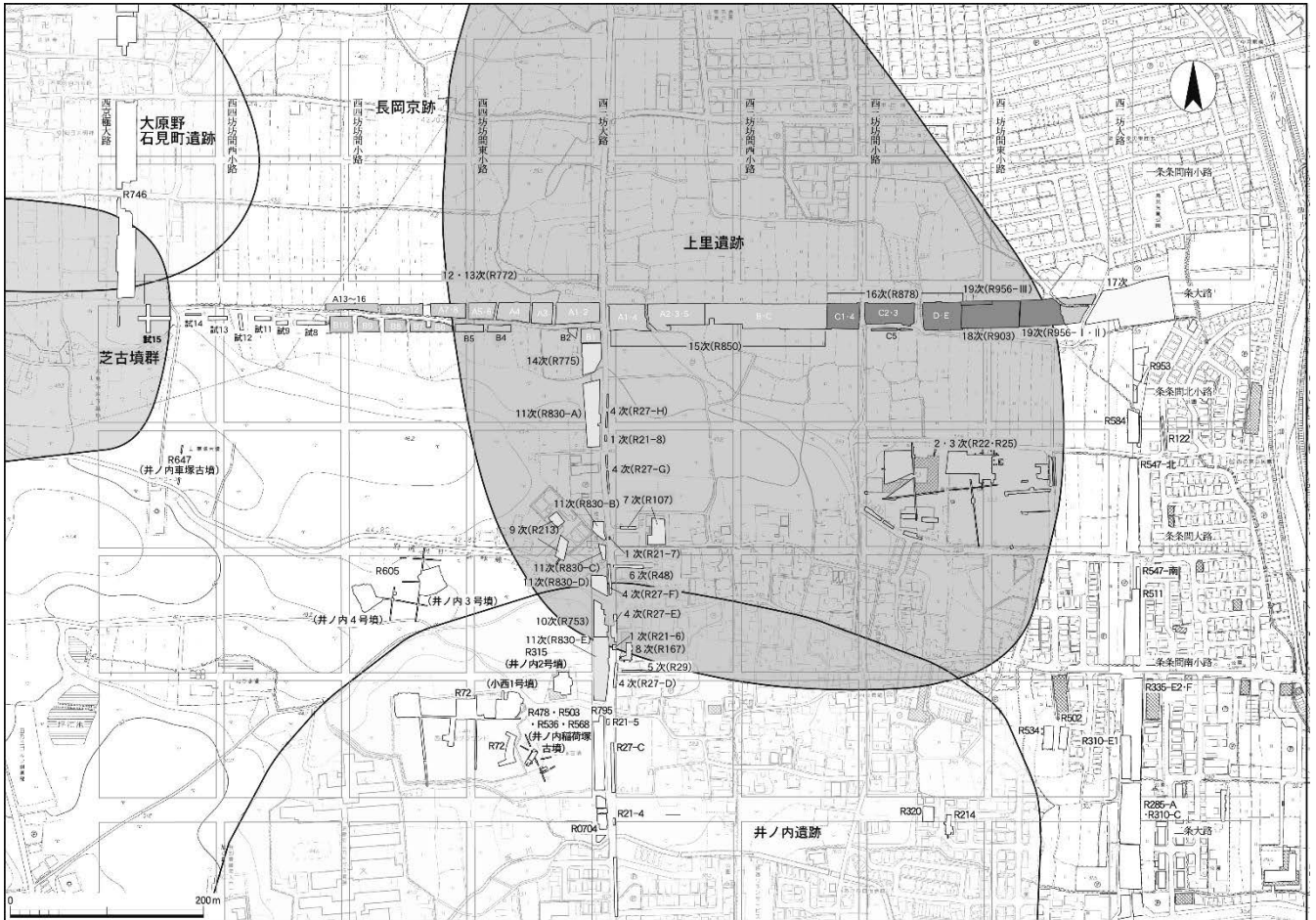
千葉豊 2012『京都盆地の縄文世界 北白川遺跡群』シリーズ「遺跡を学ぶ」新泉社



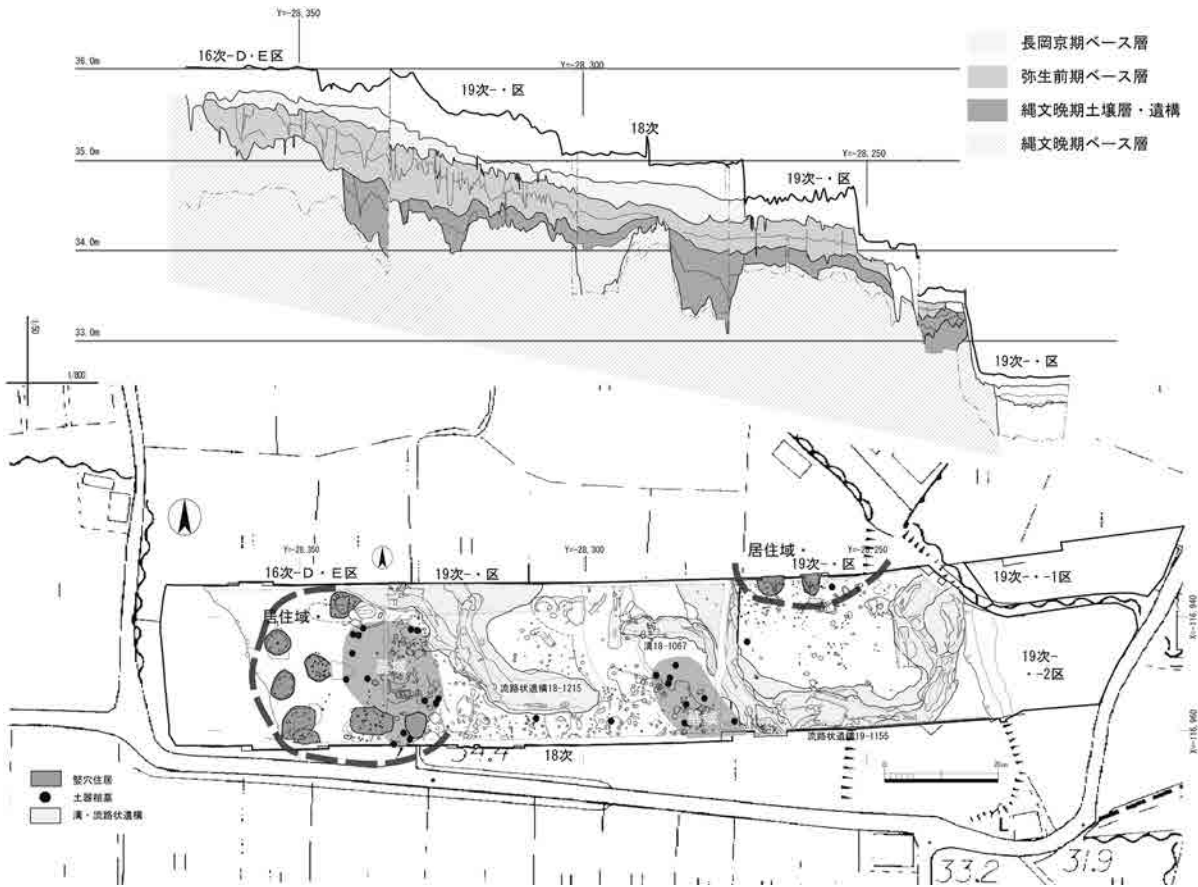
第1図 京都盆地北半の主な縄文時代遺跡



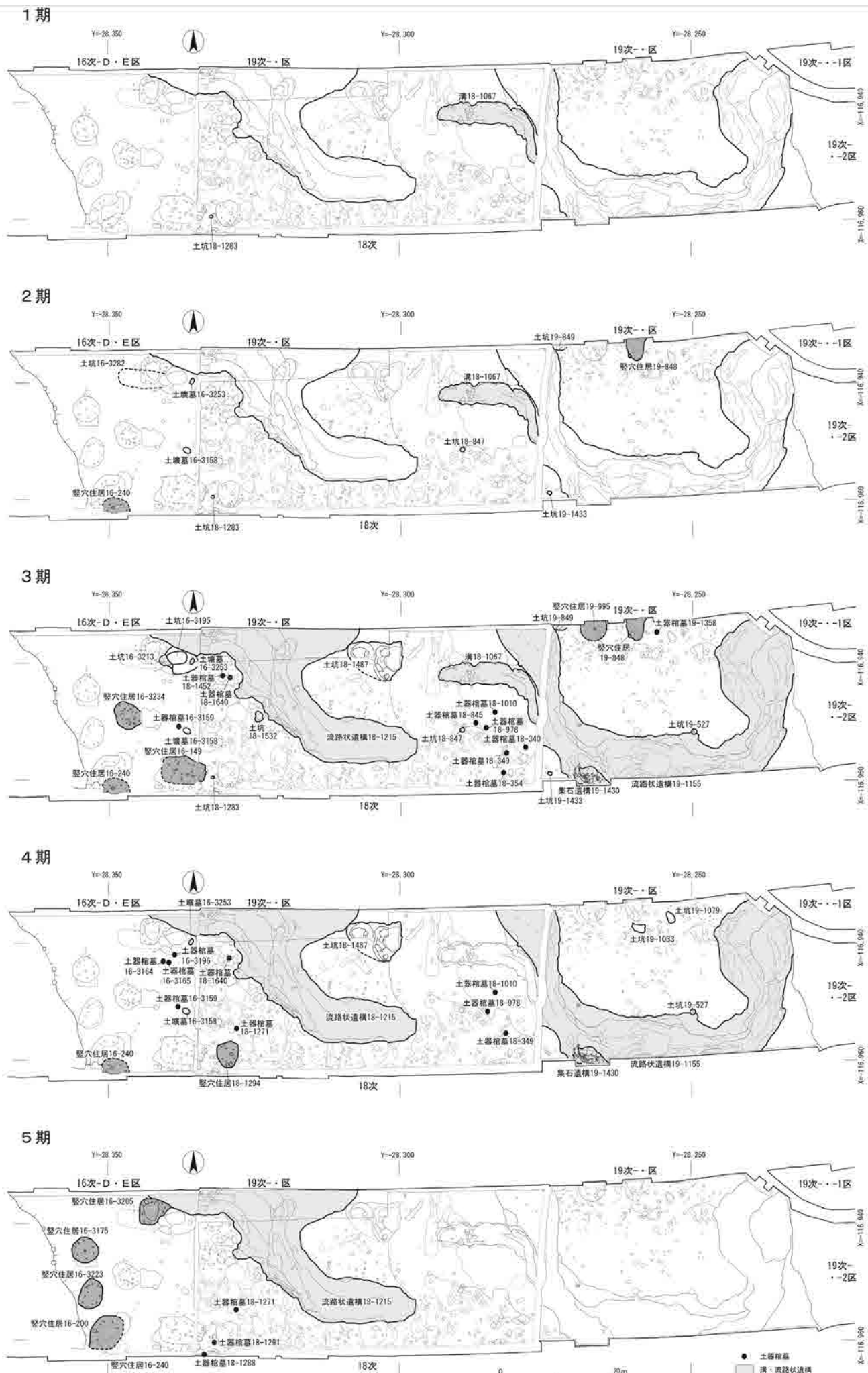
第2図 乙訓地域の主な遺跡分布図



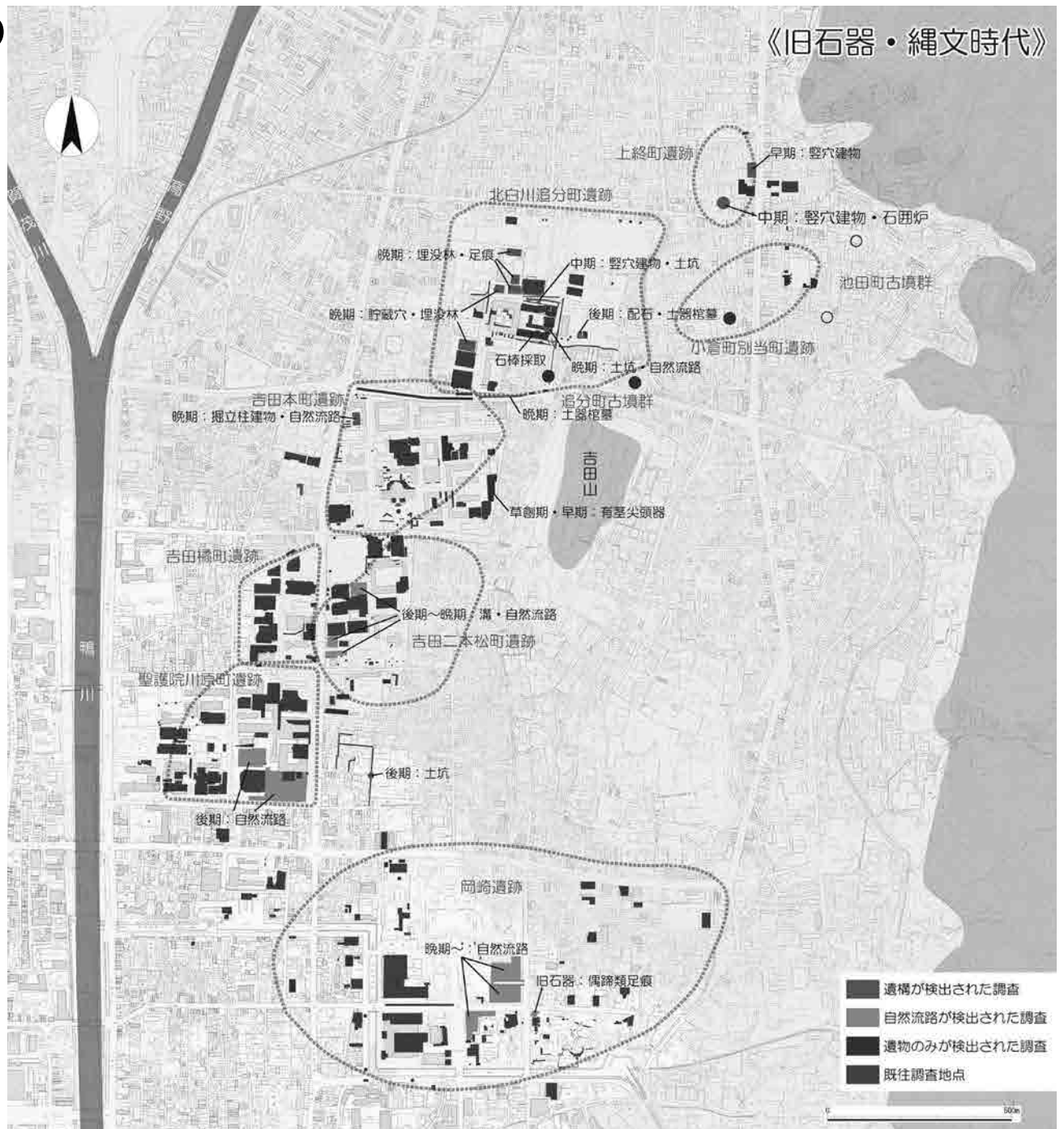
第3図 上里遺跡調査位置図



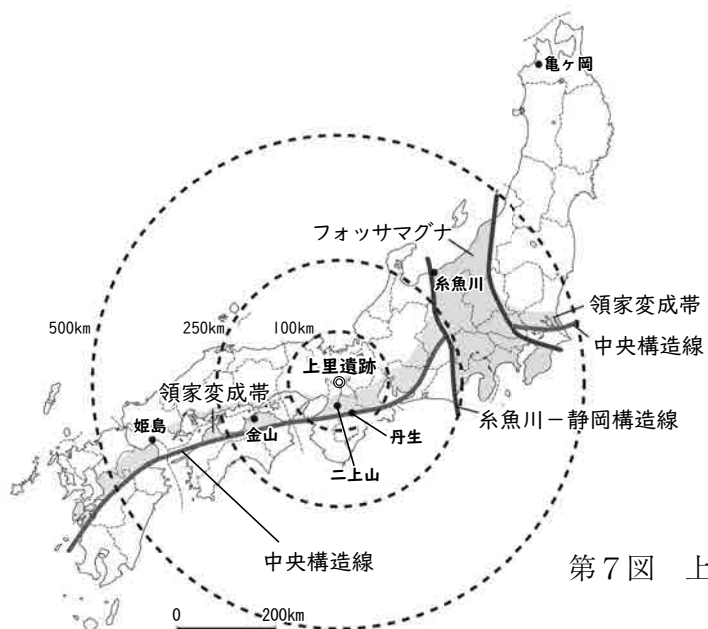
第4図 上里遺跡 縄文時代晩期遺構平面図、断面模式図



第5図 上里遺跡 縄文時代晩期遺構変遷模式図



第6図 京都大学周辺 縄文時代遺跡分布図



第7図 上里遺跡 交易イメージ図

縄文時代の交流

立命館大学文学部
矢野 健一 教授

1. 考古学の「交流」

「交流」というと、人が往来するだけではなく、友好を深める意味で使うことが多いのですが、考古学では必ずしも友好を深めているとは限らない場合にも「交流が見られる」というような言い方をすることが多いです。考古学で扱う資料は土器や石器などの物質資料なので、物質が移動している状態を「交流」とみなさざるを得ないという事情もありますが、一方的な移動でも「交流」という場合があります。これは土器や石器などの「物のやり取り」という行為が人と人とのつながり、すなわち交流なしにはあり得ないということでそのように表現しているのかもしれませんが。

ここでも、とりあえずその慣例に沿って様々な事例を紹介して話を進めますが、物の移動には人の交流が根底にあるので、その点について最後に述べたいと思います。

2. 石器の「交流」

まず、石器の材料、すなわち石材の移動の実態を報告します。近畿地方での石材は二上山にじょうざんのサヌカイトが主流ですが、香川県のサヌカイトや信州こくようせきの黒曜石も出土します。三重県では黒曜石が比較的多く、約700の縄文遺跡の中で127遺跡から黒曜石が出土しています。7割は霧ヶ峰きりがみねなどの信州産ですが、3割は伊豆諸島の神津島こうづしま(恩馳島おんばせじま)産です。大分県の姫島ひめじま産も1点出土しています。兵庫県では隠岐おき産の黒曜石が確認されています(第1図、第2図)。

サヌカイトについては二上山だけではなく、香川県かなやま金山のサヌカイトも特に縄文時代の終わりに近づくと滋賀県などでも増えていき、サヌカイト全体の3割ほどを占めるようになります(第3図)。二上山と金山では石の材質に差があり、石鏃せきぞくの大量生産に金山産が好まれたという説もあります。実は金山のサヌカイトが増える一乗寺いちじょうじK式と呼ばれる土器の時期には近畿地方など広い地域で遺跡数が減少していきます。また、同時に二上山のサヌカイトも愛知県東部など遠方で出土するようになります。これは各地で人口が減ったことと関係して、広い地域で集団同士の交流が強まったことを意味しているのではないかと私

は考えています。サヌカイトには岐阜県の^{げろ}下呂で取れる石材もあり、滋賀県の東端では二上山8割、下呂2割程度になりますが、大阪まで運ばれています。

石の質では大して差のない石材がなぜ相互に移動するのかという問題は材質の差ではなかなか説明がつきにくいと思います。遠くまで運ばれる石材はごく少量しか出土しないので、何年かに1度持ち込まれる程度で、必需品ではありません。そう考えると、人が移動することこそが目的であり、そのついでに石材が持ち込まれたと考えるのが自然ではないでしょうか。

石材だけではなく、石器の完成品が持ち込まれる例もあります。兵庫県の日本海側の遺跡では富山あたりまでしか見られない細長い珍しい形の石鏃が12点いっしょに見つかった遺跡があります(第4図)。これは北陸の縄文人が石鏃をまとめて持ってきたか、あるいは北陸に行った兵庫の縄文人が^{みやげ}土産にもらってきたものか、いずれかだろうと思いますが、石の産地がどこかまではつきとめられていません。

なお、当然のことかもしれませんが、二上山の石が遠くまで運ばれているという場合、二上山付近に住んでいた縄文人がはるばる歩いて愛知県まで持っていったというわけではありません。信州産の石が近畿地方で出土しても信州から縄文人がはるばる来た証拠にはなりません。石材は誰にとっても有用なものなので、多くの人の手を渡って少しずつ使われながら遠い距離を運ばれていったのです。さきほど、北陸の縄文人が石鏃を持ってきたと考えたのは、北陸の特徴のある石鏃が1遺跡で多数出土したので、多くの人の手を経たわけではないと考えられるからです。

3. 土器の「交流」

土器の「交流」は石器よりも細かな点が問題になります。石器はどれも形が似ていますのでその土地の特徴がつかみにくいのですが、土器は文様や形が多様なので、どこの土器か区別が付きやすいからです。しかも、土器の原料(粘土そのものというよりも粘土に混ぜる砂粒)は石材と同じで産地をつきとめやすいので、土器の土を調べれば、その土器がどこで作られたかわかります。正確に言えば、その土器の原料がどこでとれたかがわかるのですが、普通、土器の原料を何十kmも遠くまで持ち運んできて土器を作ることは考えられませんから、土器の原料を調べれば、だいたいどこで作ったかわかるのです。

そこで、京都の特徴を持った土器が岡山で見つかったとすれば、土器の原料を調べれば、京都の縄文人によって京都で作られた土器が運ばれたのか、京都の縄文人が岡山までやってきて岡山で土器を作ったのかがわかります。この点について面白い事例があり、京都で出土した土器で他地域の文様を持つ土器の原料を調べたら、北陸の文様を持つ土器は北陸

で作られたものだったことがわかりました(第1表)。これは北陸から京都まで人が土器を持って歩いてきたのだと思います。何人かの人の手を経たものかもしれません。しかし、東北の文様を持つ土器は京都で作られたものだと判明しました。これは東北から京都まで人が歩いてやってきた証拠です。もちろん途中で宿泊しながら何ヵ月かかったかわかりませんが、東北から来た人が京都で作った土器であることは間違いありません。

この場合は東北の土器はまぎれもない東北のもので、北陸のものも北陸であることは確実だったのですが、その点が断定しにくい場合も多くあります。土器の文様は似たものを真似して作れますし、東北の人が京都に来て年数がたつと、周りの人と同じように京都らしい特徴が混じるようになるはずだからです。言葉と同じで文様もその土地になじんでいくのです。その点を逆手にとって、元の文様が変形している点から製作者の履歴^{りれき}を推測することもあります。

たとえば、九州では縄文を使わない文様が多いのですが、時代が下がると本州と同じように縄文を使うようになります。縄文は本州から伝わったものであることは間違いのないのですが、九州独自の文様も縄文にプラスされているものもあります(第5図)。本州からやってきた人が九州独自の文様を取り入れたか、逆に九州の人が本州の縄文をとり入れたかどちらかです。実は、残念ながらそのどちらかを判断するのは大変難しいのが常です。

土器の文様といえば曲線で描く図柄だけではなく、縄文の縄の撚り方が違えば縄目の文様も違ってきます。この縄目の縄の撚り方を調べた研究で土器の「交流」を明らかにした分析があります。先程、述べた九州に縄文が伝わる時の土器は、岡山の遺跡名をとって中津式^{なかつ}と呼んでいます。この中津式は関東地方にも影響を与えています。中津式の縄は瀬戸内では右撚り、近畿では左撚りでした。関東でも中津式によく似た土器があるのですが、それは近畿と同じ左撚りの縄です。しかし、中津式の次の土器は近畿も瀬戸内と同じく、右撚りに統一されます。

この時、近畿の遺跡数は減少しているのです。先に香川県の金山のサヌカイトが近畿で増える時と同じです。近畿で人口が減少して瀬戸内との人のつながりが増加したと考えられる時に、近畿も瀬戸内と同じように右撚りの縄を使うようになるのです。縄を撚る向きなどどちらでもよいはずで、右撚りでなければいけない理由はありません。にもかかわらず、縄の撚り方が変化するのには右撚りの縄を作る人との「交流」が進んでその影響を受けたからとしか考えられないのです。関西弁の人が岡山弁の人と混じって住むようになると岡山弁に変わっていくわけです。

このように文様や縄の撚り方が変化していくのは引っ越した人がもとの方言を忘れていくのと同じ理屈で説明できます。親は元の方言をしゃべっていても子供は引越し先の言

葉を覚えます。そういう目で土器を見ていくと、文様が変化していく場合は多いのですが、全く変化しない場合もあります。縄文時代の早期、約8000年前には、西日本の土器は押型文おしがたもんと呼ばれる文様を持ち、東日本の土器は沈線文ちんせんもんと呼ばれる文様を持ちます。この2つは静岡あたりで出会うのですが、静岡では押型文と沈線文が同じ程度、遺跡で見つかりますが、互いの文様が影響を受けている気配は全くありません(第6図)。互いが同じ村で暮らしているのに、全く会話をかわさなかったように見えます。これは実に不思議な現象です。ひょっとしたら、押型文の人と沈線文の人は、本当に苦労してお互い言葉を交わしたか、あるいは、かなり異質な両方の言葉(二方言あるいは二言語)を使う集団だったのではないかとさえ思います。

そのような状態なのになぜ一緒に住んでいたのでしょうか？私は結婚するためだと思います。人口の少ない縄文時代に、同族の血の濃い少数の集団で結婚を繰り返すのはよくないことを知っていて、あえて血縁関係が遠い集団と結婚する規則があったのではないのでしょうか？時代は違いますが、遠距離でよく似た文様を持つ事例が多いという分析をしている縄文土器の研究もあります。

4. 人の「交流」

結局、物の「交流」も人の「交流」です。先程、中津式という縄文土器の文様が九州や関東に広がっていくことを紹介しましたが、単に文様が広がるわけではありません。実は、この時から縄文土器は文様を丹念に施したり器面を丁寧せいせいにしあげる精製の土器と、それほど丁寧そせいに作らない粗製の土器に分かれていきます。これは縄文土器独特のあり方で弥生土器や須恵器・土師器にはこのような明確な区別は存在していませんし、世界的にも非常に珍しい土器のあり方だと思います。この精粗二重構造せいその起源は瀬戸内を含む本州西部です。

中津式より少し前から、中部地方から近畿地方に少しずつ人口が移動してきて、その増加した人口が少しずつ西に流れていきます。その人口増加の波は南九州まで1000年間以上かけて到達します。この人口増加の波と共に様々なものが東から西に伝わります。そのなかには、豆栽培まめさいばいの技術、石囲い炉いしがこを持つ住居、土偶どぐうや石棒せきぼう、子供の墓などがありますが、土器の精粗二重構造もその一つです。これらのものは1000年間以上かけてゆっくりと人が伝えたものです(第7図)。

私は隣の地域との人と人との結婚の連鎖が繰り返されていき、文化が東から西に徐々に伝わって、最終的に西日本全体が広く新しい文化要素を共有したのだと考えています。ゆっくり伝わった証拠に、石囲い炉が九州に伝わった時には形がかなり変形していますし、

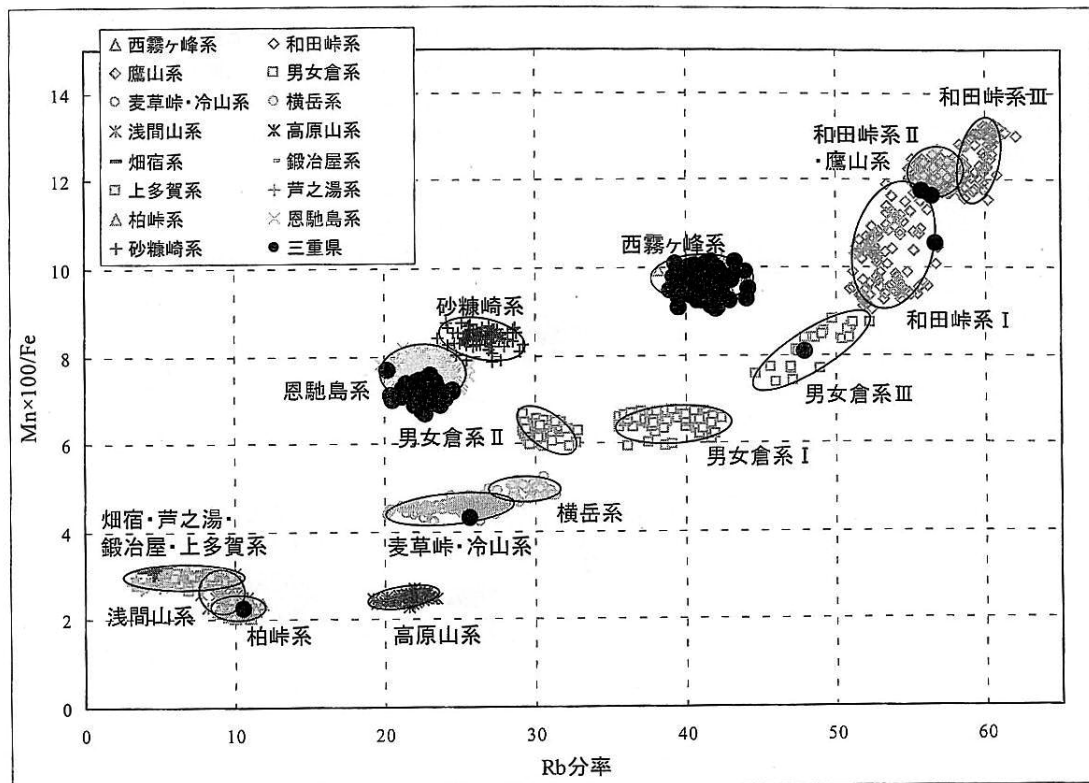
近畿ではその頃には石囲い炉はすたれていました。しかし、縄文土器の精粗二重構造は広い地域で維持され、弥生土器が出現する基盤になります。縄文人が1000年間以上かけて作った人の「交流」（結婚）のネットワークを通じて、水田が今度は西から東へと普及していくのです。

【参考文献】

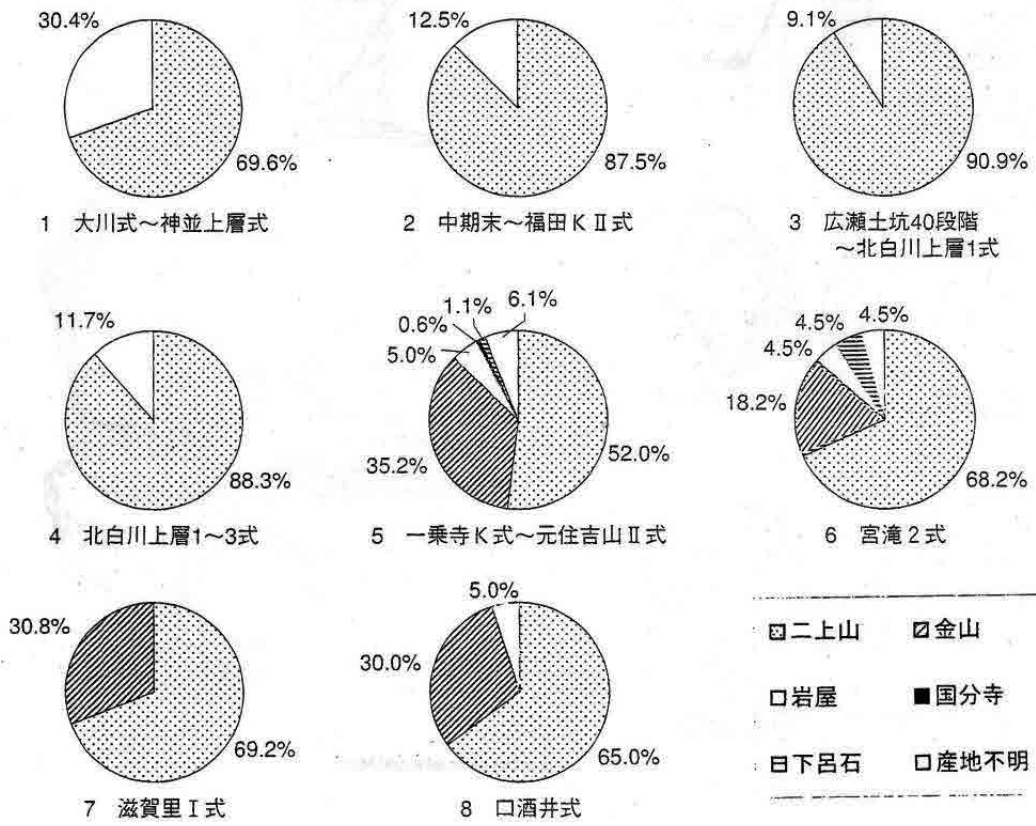
- 石田由紀子 2014「縄文原体からみた土器型式変化とその背景」『考古学ジャーナル』660
- 今福利恵 2008「土器と集落間関係①」『縄文土器総覧』アム・プロモーション
- 清水芳祐 2010『古代窯業技術の研究』柳原出版
- 勅使河原彰 2013『ビジュアル版縄文時代ガイドブック』（シリーズ「遺跡を学ぶ」別冊03 新泉社）
- 田部剛士 2004「縄文時代後期・晩期の石材利用」『縄文時代の石器—関西の呪文後期・晩期』関西縄文文化研究会
- 竹野町教育委員会 1990『小森岡遺跡』
- 田中総 1997「中部・東海地方における沈線文土器の様相」『押型文と沈線文』長野県考古学会縄文時代(早期)部会
- 三重石器石材研究会2010「三重県出土の黒曜石とその原産地推定」『立命館大学考古学論集』V 立命館大学考古学論集刊行会
- 矢野健一 2016『土器編年にみる西日本の縄文社会』同成社
- 横山浩一 1985「型式論」『岩波講座日本考古学1 研究の方法』岩波書店



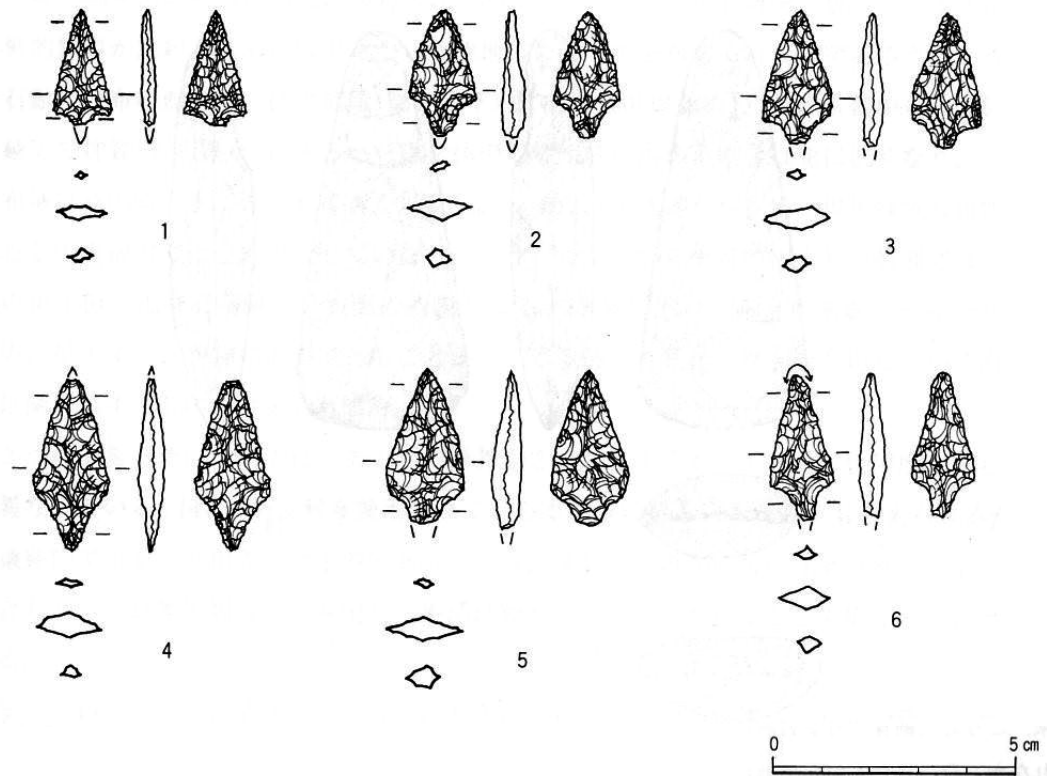
第1図 石材の産地(勅使河原 2013)



第2図 三重県出土の黒耀石の産地(三重 石器 2010)



第3図 近畿地方出土サヌカイトの産地(田部 2004)



第4図 兵庫県竹野町小森岡出土の石鏃(竹野町 1990)

第1表 大津市滋賀里遺跡出土器の鉱物の差(清水 2010)

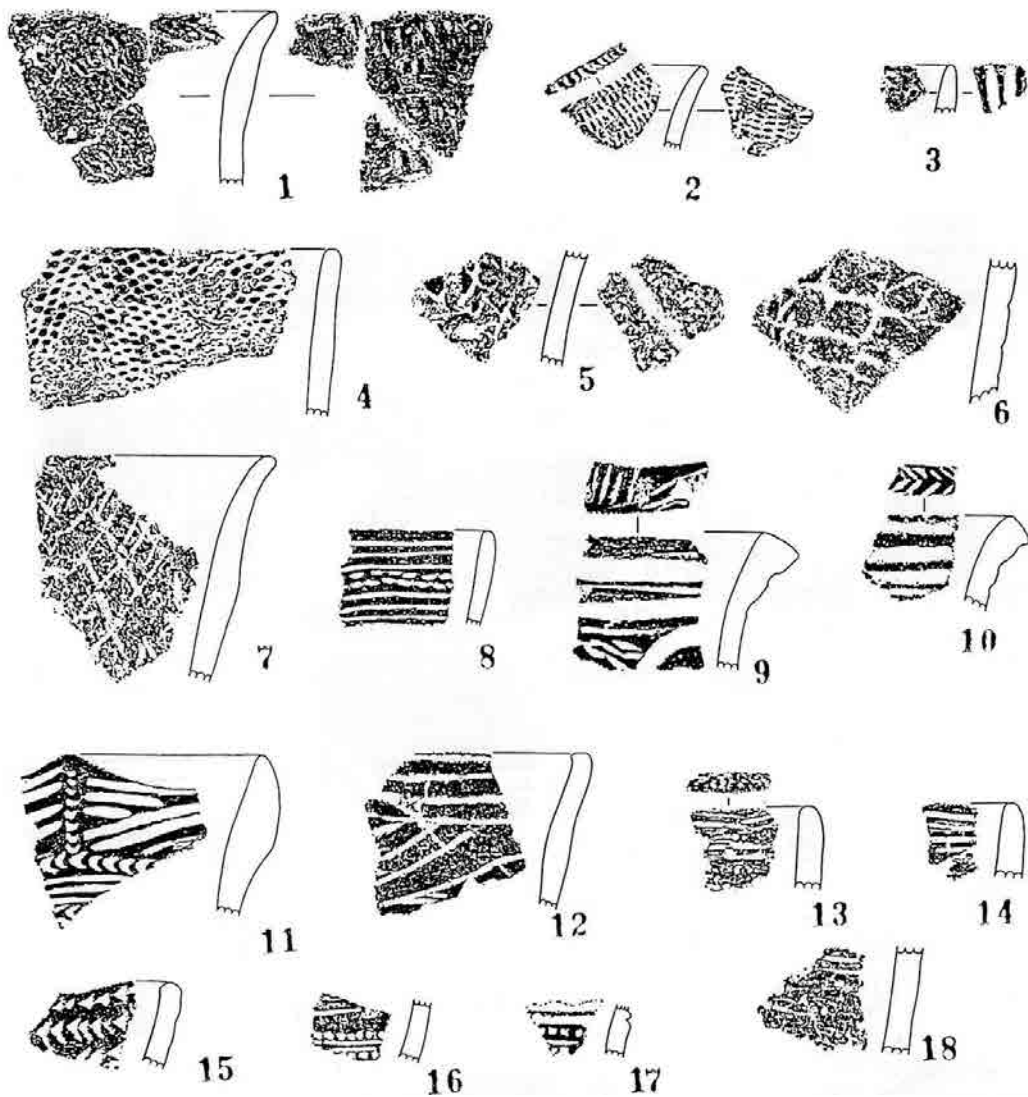
*北陸系土器だけは安山岩が含まれる。

	石英			カ長石 構造 サイト	斜長石	微斜長石	角閃石	輝石	黒雲母	白雲母	ジルコン	スフェン	緑簾石	不透明鉱物	火成岩				堆積岩		変成岩		
	一般形	波動消光	融食形												花崗岩	花崗閃緑岩	石英閃緑岩	安山岩	砂岩	泥岩	結晶片岩	接触変成岩	
滋賀里式土器	1	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	2	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	3	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	4	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	5	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	6	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	7	◎	○	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	8	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	9	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	10	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	11	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	12	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
北陸系土器	13	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	14	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	15	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	16	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	17	◎	○	○	○	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	18	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	19	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	20	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	21	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	22	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	23	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	24	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
東北系土器	25	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	26	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	27	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	28	◎	○	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	29	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	30	◎	○	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	31	◎	○	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	32	◎	○	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	33	◎	○	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	34	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	35	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	36	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	37	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	38	◎	○	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	39	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	40	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	41	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	42	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	43	◎	○	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	44	◎	○	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	45	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	46	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	47	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	48	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	49	◎	○	○	◎	◎	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	

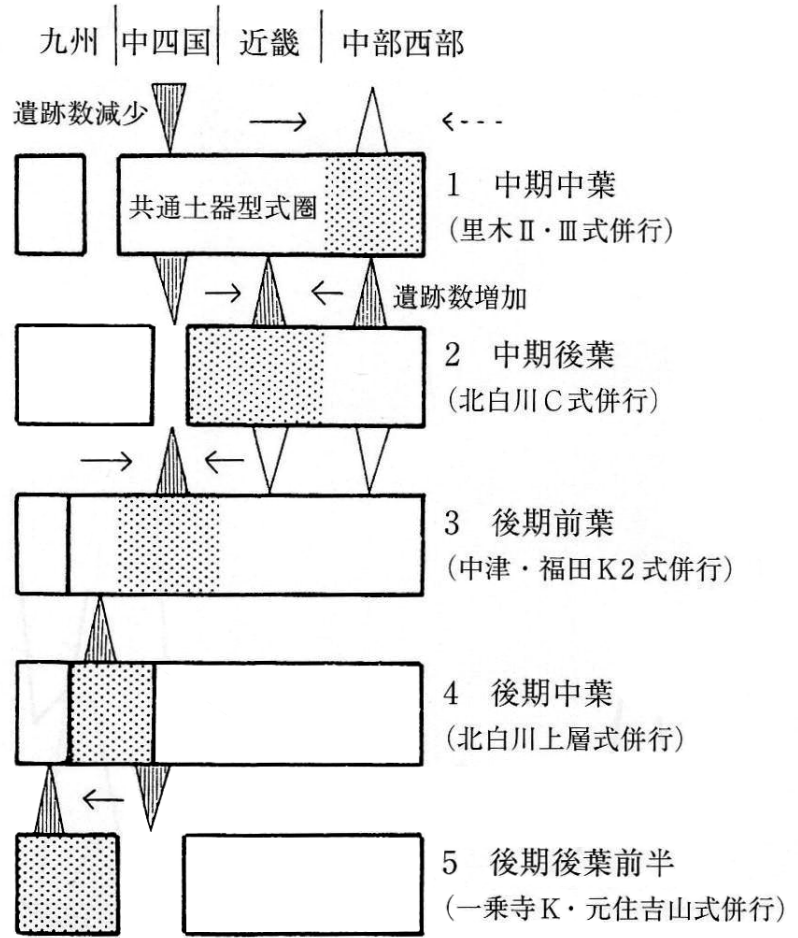
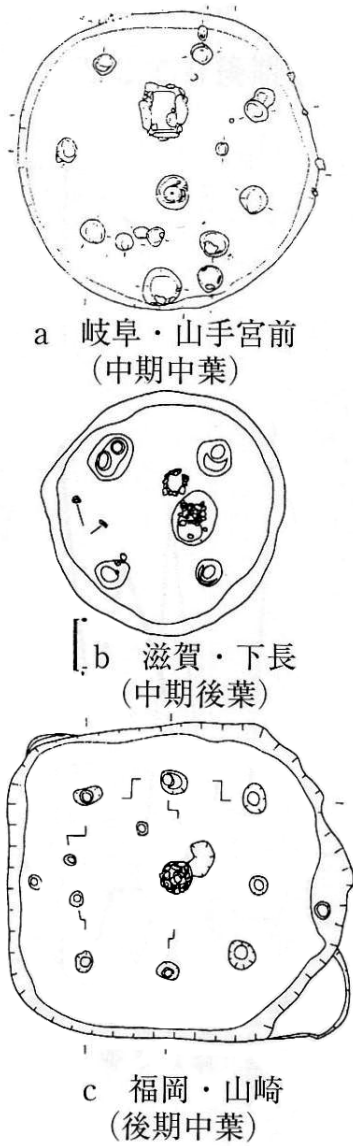
(○：少量含む ◎：多量に含む)



第5図 中津式(b)と九州の土器(c)の文様が混じった土器(a)(横山 1985)



第6図 押型文(1-7)と沈線文(8-18)が共存する静岡県富士宮遺跡 沼久保坂上遺跡(長野県 1997)



*網かけは石囲炉分布西端地域。
矢印は想定可能な人口移動

第7図 石囲い炉を持つ住居の東から西への波及(矢野 2016)

*もともとは大きな石を方形に並べるものだが(a)、小さな石を並べたり(b)、
小さな石を穴に敷き詰めたり(c)、だんだん形が変わっていく。





**KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER**

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナーなどの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>



公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075) 933-3877 (代表) Fax (075) 922-1189